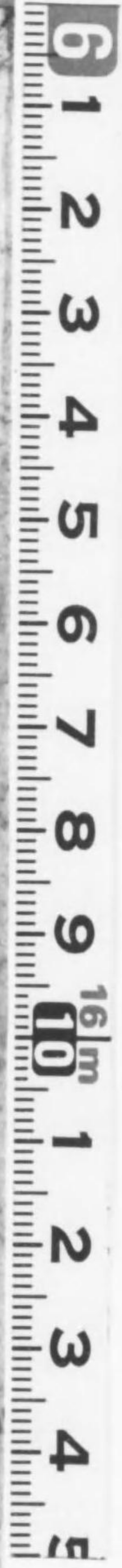


特 235

434



始



特235

934





## 中川陶雄略歴

本名、末雄

明治四十年九月十三日、熊本縣八代郡宮原町早尾小字坊屋敷ニ生ル。

大正九年四月、熊本縣立八代中學校ニ入學。

大正十四年四月、官立熊本藥學專門學校ニ入學、昭和三年三月、同校卒業。

右卒業後直チニ上京。在京一年餘。歸郷後、病ヲ獲テ戸馳、津屋崎等ニテ

療養生活ヲ營ム。七年十月、健康恢復シテ歸宅。

昭和八年三月、篠原嘉代子ト結婚。

昭和八年九月、「日本詩壇」ニ關係。詩作品ヲ發表、晩年ニ至ルマデ精進ヲ續ク。尙、神戸ノ「噩神」ノ同人トナリ、詩誌「花粉」ヲ主宰シ、熊本ノ「地方派」

ニモ作品發表ヲナス。昭和九年七月、宮原町本通りニ「ナカガハ藥局」ヲ開業。

昭和十一年十月、再ビ健康ヲ害シ、靜養中ノトコロ、明ケテ十二年正月ヨリ

熱ドラス、二月廿八日夜十一時ヨリ病勢急變シ、翌三月一日午後四時長逝ス

享年三十一歳。

昭和十二年五月、「日本詩壇」ハ中川陶雄追悼記ヲ編ム。

改名、釋光澤信士。

## 序

季節に夙い氣流が、清冽な明暗を投影して流動する圈内に、酸性のきつい、鋭いものがナイフのやうに額に突きさゝつてくる。何か切ない息づかひ、何かに向つて伸縮する生命の、簡潔な、切實な急速調が、時には寒く、時には熱く、觸發するものの感性を震律させてやまない。

この酸性の氣圈に、この寒熱の烈しい震律に、餘りにも敏感に上下する體温計の朱い水銀線。その點描する圖表の音階。それはまた瞬時の夕映えの燦光を詞藻に燃焼させて、若く、美しく碎け散つた秀れた詩魂の譜。

かくて遺るは、胸を撲ち、骨に鳴る唯一卷の詩書。

中川陶雄君逝いて既に數年。私はこの亡友の詩篇を身につけて哀惜して來た。この亡友と隱微に交はす友情は、今も尙、私を切なくさせる。

私の哀惜と隱微な交疊による出版への逡巡は、君の臨終の言葉と遺族の信賴とに應へるためには數年を空しうした。何ための怠慢であつたらうか。私は、はるばる熊本の地に旅して、若く美しい未亡人と君の愛兒

とともに君の墓前に額づき、落涙しつゝ香華を手向け、また君の臨終の折その儘に保存されてあつた病室を低徊して、暮春の一日を悼んだことを忘れてゐたのであらうか。私の切なる哀念が何ために君の詩書を軽々しく編ませなかつたのであらうか。私は責められてよい。併し、今、君の詩書を上梓させようとする私の手は君の墓前で合掌した時と同様に浄められてあることを信じて貰へば足りる。

君の亡き後、夫人は健氣にも家事を守り、君の愛兒は君の佛さながらにすこやかに成長されてゐる。君の肉親によつてこの詩書が君の靈前に捧げられる頃には、君を敬し、君を愛し、君と親しんだ人々の胸に、君の詞藻が花咲くであらう。君の詩は、君の肉親に、君の友に、君に共感する純潔な詩人や知己によつてのみ披かれ、匂ひ立つ風格を甦らせるであらう。そして君は其等の人々の中に、詩を通じて、いつまでも生きてゆくであらう。

吉 川 則 比 古

## 桔梗篇

鍼のやうな言葉の應酬の裡にも、ふと悲しげな眼付がちらついたり、憤りに凍つたままの肉親の血が痛く觸れてくるのであつた。争の果はひつそりと獸の如くおのれの傷口を舐める、蒼い

舌で。それにしてもこのやうに寂しい地獄の時間と共に背中を流れるものは何であるか。この夜更け、白い襖に咲いてゐる桔梗の叢へ風のやうに消えるものを私は見た。一掴みの札幣束さつたばを奪つて去つた叔父への憎しみも、いまは葉末に揺れながら澄んでゐるのだ。

小 徑

霞がふりかゝる、枯れた眉毛に  
老ゆることなきそなたの瞳と唇に

枯草と石のあひだにある小徑  
そのやうに寂びてひとすぢわれにつながるもの

野火は消えた

若き日の終りに歌を燃やして

朱あかに身を染めたまま、花も枯れてゐる  
かずかずの言葉に似て

そなた 暗い嬰兒を抱き

そなた 愛の氷柱つららを負つてこの徑を歸れ

## 秋 聲

その家の裏戸を出て、<sup>ふた</sup>遠い竹林に這入ると、孟宗の圓い幹に冷えてゐる漏れ日のしづけさが不意に私の背すぢに透つて來た。

牛方や樵夫や老いた百姓の一座に伍して、私の投じた一札は見

事に金的を射止めたのだ。重たく口をとぢたまま、男達がのろのろ歸つて去つた後、盆に積まれた紙幣束さつたばに誰かがコスモスの枝を添へてゐた。

私はひっそりと秋草の小徑を歩いた。透明の水音垂るる笕の上を、妻や子と啼きつれてわたる鴨。そのあはれな羽が腸に泌みて思はず眼を擧げる。

竹林をぬけると柿の實の揺れ光る坂にかかつた。



## 残雪

ひらかれた窓いつばいの光線が、このやうにお前にさやぐ。東の空の冷たい晴れに、山脈の残雪を少し離れて、陽が清冷に確くのだらう。窓近く青桐が立つてゐる、青く澄んだ皮膚に露を帯びて。鏡臺に坐るお前の首すぢも、今朝は、すつかり影を拂つて澄んでゐる。——草や木や鳥をつらぬく淺春の生命いのちを一律に呼吸してゐる。

この明るさのなかに、自分だけ暗くしてゐる影がある。明るい水底の岩影のやうに。お前は會釋する、鏡のなかのお前の顔と、鏡のなかのもう一つの顔へ。お前は知つてゐる、荒い季節を沈めてゐるその人の額を。

いつか透明な光と風が、私の肩へまはつてくる。私は私の樹皮を撫でる。そこに一つの傷痕が固まつてゐる、黒く。遠いかなしみのやうに、それは痛む。

どこかの梢で小鳥がしきりに誰かを呼んでゐる。小鳥を眞似て、やはりどこかで子供が口笛を鳴らしてゐる。

## 鞭の痕

冬空の下に、冬空よりも冷えた色の天幕が張られ、樂隊がヤケに狂躁した。風につれて榎の黄いろい葉が、その天幕へはらはら落ちた。蝟集した群衆は、一様に冬の貌の暗さに呆けてゐた。煤の如きものゝ積つた心に、不敵な音楽は棘のやうに突きさゝつて來たが、おし黙つたまゝ、皆そこに立ちつくした。

猿に似た少女達の曲藝を、私は飽かず眺めた。空中高く、一本の針金の上の若衆姿の少女の繪日傘に、白い微笑が咲いたり、怪奇な侏儒と戯技れる可憐な肉體に、ふと青春が匂ふたりした。ふり袖や肉襦袢を脱げば、背中に、赤い鞭の痕を負ふてゐる少女達である。

私はあたりを見まはした、鴉のやうに。天幕の内部にぎつしり、せつない啞の顔達が瞬いてゐた。それらの上に、早く青い夕暮が降りてゐた。

## 田地圖面

はつはつ麥が芽ぐんで、薄い日射しの泌みる冬田。ただ一色の土のひろがり動く影とてなく、草枯れの畦に立つものゝ肩さへ、ひとゝきやすらひの心に似る。眼近に紅葉の消えた山脈が在る。古い綿のやうな雲も在る。それらの隙間から冷たくしら

けた風が吹いてくる。そんな空白の裡に、聲を呑んだ鴉のやうに立つてゐる叔父と私。

叔父の示す一枚の古びた圖面は、そのやうに古びてしまつた制度の相すがたの寫しにほかならない。その一局部を切つて捨てようと私は想ふ。だがなんと云ふしづかな土のひろがりであらう。圖面を握る老いた手が、かすかにわなゝく。ふかい泥にまみれて喘いだ人と馬の心がその手に見える。田を賣る心がふと凍つてしまふ。

## 断面

愁嘆の言葉も、激しい叫びも其處にはない。臘燭の焰ほども耀くことなく一つの生命の消えるとき。朱樂の葉にみぞれが降つてゐる。圍爐裏をかこんでみんながそれを聞いてゐる。

蒲團をめぐつて見る。異様に腫れあがつた栗色の厚い胸、無慙に破れた肺を漏れて空気がしだいに皮下に膨らむのだ。若者の

眼にしづかな光が湛へられてゐる。死の意識に淨められ、無垢な童子のやうに澄み透つた顔付である。

救済事業の村道改修工事。切崖の生まなましい断面の裾で、大勢の男達にまじつて若者は鶴嘴を振つてゐた。不幸は一瞬に起きる。不意に岩のやうな土塊が脊骨へ崩れ落ち、押潰した。

暗い壁の上にかさなりかさなつて動かない老若男女の顔。おやぢはキョトンと坐つてゐる、いつもの毛すねを焙りながら。軒近く、朱樂の葉に泌み入るみぞれの音がいつまでも止まない。

替

1

光の中で紅い木が落葉する  
飢ゑたる狼でなく飢ゑたるハムレットよ  
あなたの悲劇の開幕

2

牢獄を出て二本の脚の自由を得た  
狡猾な詐欺師より狡猾な良を見よ  
現実の柿の種

金貨の魔法について

肥太<sup>ふさ</sup>つた貴婦人の微妙な心臓

ではなく 女房の

淫賣婦に身をおとした倫理について

3

一個の林檎の色調の變化をよく視るために眼を閉ぢよ  
意識の球面に塗られた暗色

敗退の獅子は完全に孤獨なのだ  
ガラスを這ふ水滴はあなたの心に流れる暗涙である

4

あいつは發狂した

あいつは牢死した

あいつは轉向した

あいつは姦通した

あいつは

あいつは

あいつは

あいつは

5

あなたは歸つて來た

血の乾いた傷口

家庭 家族 家畜

鐵の轡を噛みしめるあなた

## 訪客こなつて

客間の夏は貞淑なレエスに飾られた

桃花心木マホガニの卓子の楕圓形

夫人は優雅な弧線に跨り

秀拔な鼻を見せた

この耀く物質の世界で

ひきつく咽喉をもつて

僕はしゃべつた

夫人の聰明な白薔薇がそれを傾聴した

僕はへどもどした

しかし僕は正義のタケノコである

生きることとはなんと熾烈な浪費であらう

邸の一隅に

夫人は理智の花畑をいとなみ

優雅な祕密と共に花達は薫つた

雌蜂雄蜂の騷擾に日々は流れた

適量の毒に夫人の皮膚は磨かれた

科學も藝術も

夫人のやさしい指令に服し

高価な髭をもつた精神が擁護された

香水は

コルホーズ  
集團農場は

キモノは

缺食兒童は

小型要塞は

文學は

陶器は

ヒットラーの男つぶりは

楕圓形の椅子に

僕の怒りを装置した

理智的な鐵砲百合

理智的な時計

理智的な狎

等は僕に冷淡であつた

夫人の器用な手が

三鞭酒の栓を「ボン」と抜いた

その音は僕をはちき飛ばした

夫人は禮節をまもつて艶然と斜めに向いた



## 標識

路地に點つてゐる暗い灯が、めいめいの貌をしづかに照らした。それは一つの行路を照らす灯と言ふよりも、深く大きな闇の孤獨の標識であつた。それは別々の魂の上にも一色の翳を落した。私も女とひとしく身をひきしめてゐた。

いくつかの塀や門が森閑と並んでゐるのに、犬のやうに戯れ纏れあふささめきが何處からともなく漏れ、氷の頬をかすめて、ときをり鋭い影がすり抜けて去つた。女はかたく唇を閉ぢたまま、うなじをあげて歩いた。——夜空にひとときは高い屋上電飾の豪華な明滅に、眉一つ動かさぬ横顔を見せて。葉のない柳の枝が、そよりともせず垂れさがつてゐた。私も女も行手の空氣がしだいに稀薄になるのを感じて、わづかに、寄りそふた肩を顫はせるのであつた。

## 歴史的陋巷観

古ぼけて愚劣に歪んで

まるで笑止なけむりのちぢれ毛を

曇つた空に吐いてゐる煙突

彼女がある一つの精神の象徴であるとすれば――

などと考へることは意味がある

隣人は十九世紀的提灯の製作に餘念がない

他の隣人は自轉車を持たぬ自轉車屋

他の隣人は犬と子供とコーチンに金切聲をあげる寡婦

他の隣人はリヤ・カーに一個の哀愁の鈴をつけて純粹の大根漬  
を行商する一人の「轉向者」

一本の歪んだ煙突の下に出来た人生の吹溜り、紙屑や木の葉に  
まじつて、吹き寄せられた神々である。

提灯は古典的に

自轉車は新型を

コーチンの籠は日向に

漬物はいよ／＼純粹に  
おお　そして　煙突はまつすぐに  
萬事ぬかりなくやりたいものです。

## 守錢奴

僂佻のやうに疊に背を曲げて、彼は陰氣に光る眼を据ゑてゐた。夜更けのしづけさをこめて、チン　チン　と金貨や銀貨が鳴つた。今宵はそれが彼の心臓を刺すやうに響く。

白熱光をしいんと放射してゐる電燈。まはりには重量ある闇だ。彼はみづからの裡に潮のやうに退いてゆくもののあるのを知つた。彼は叫ぶことも忘れて孤獨の岩陰に佇んでゐた。

その日その日の卑しい錢をかぞへる業に、耀やかな血は涸れ、  
さながら癩れた尿の跡に似て白く乾いた胸の底に、たまたまに  
滴り落ちる透明の雫。彼は貧しい砂の上にそれをとどめ、それ  
をかなしんだ。

彼はいまや、眞實の、おのれの所有を誤りなく計算しようと欲  
した。膝に、骨張つた手が身を縮めてゐた。彼は烈しく問を發  
した、汝何を掴むべきか！

ふと彼は聞き耳を立てた。青い蚊帳の中に妻と子の寢息が澄ん

でゐた。彼はしづかに錢を掻き集め、袋の紐をかたく締めた。

## 淪落

金いろの秋の曠野が火の粉のやうにとび散つた、捕へられたあの一瞬が小鳥を驅りたてる。

小鳥は狂ほしく籠の網目に頭をたたきつけ、たたきつけた。

華奢な爪さへするどく敵の狡智を蹴つた。

ああ、しかし、すでにちいさな額にひとすぢの碧血はしたたり

不逞な網目の空間に雫の渦を卷いた

雫の天使を、私は呆然と見成るほかはない。



女は日蔭の餌をついばみ、あきらめることに馴らされてゐた。

絹や寶石や猫や男に馴された白い肌。

女はもはや、繊弱な羽根をひろげて、黄金の網目の空間に舞ふことすらかなしまなくなつてゐた。

白晝、女は一匹の蝙蝠になり、宿命の止り木にぶらさがつたまま眠つた。

## 烈日について

いつそ諦めて野稻蒔いときませうか、と相談を切り、さて、あははははははと空虚に笑つた。笑ひが、陽に焼けた皮慮の隅々へ波紋のやうにひろがり消えると、ふつと眞顔にかへり、若い百姓は煙管を銜へて眼を膝に落した。——いちめん白つぽく乾いた山田。縦横無盡に、悪魔がひつ搔いたであらうやうな龜裂が走り、植ゑた苗はみすみす葉先から枯れよぢれて了つた去年のことがちーんと衝き上げて來たのだ。そして今年も——。この烈日を天の憤りの具象であると云ふを止めよ。

自然現象に拜跪するのは豚を拜むことと等しく愚劣だ。火には水をかけよ。われらこそ憤りを地上に耕し、千年を経て存るものではないか！盲目の老母、青澁と襤褸の餓鬼共、カマキリに似た蟻、それから一族と馬と白色レグホーンの巢喰ふ低い藁屋根などを遠い世界の風俗のやうに意識に泛べながら、眼鏡の光る地主の品のよい鼻梁をぼんやり眺めてゐた。

## 山脈

その巔に銀色の陽を失ひ  
霧と紅葉と微風とをうしなひ  
ただに荒涼の姿態を横たへて  
きびしくせまりくるものを待つ

### 山脈

凋落の果てに凝然と在り  
北方の風の警笛に素裸と晒しても  
荒い皮膚の下には、しみじみ暖い  
緑の草葉が赤に 黄に

結んだ實が熟れ また花咲かせ――

見詰める手柄てぎ先き一間の地面にも

やたら涙がしぼられる 村から街へ 何十年一日

ふりかへれば はかない轍は白く 己が人生

「あゝ、駄目だ！ 一人は朝飯は食はなかつたなあ！」

鎖にしばられた犬つ子だつて はね返す力はあらうものを――

老人は力なく手柄てぎを下して

「何も知らねえお前が よつ程幸福者だ！」

きつすぎるお天とうさまの下で犬の吐息がいそがしい。

II



ギリシヤの空

木が立つてゐる 葉を落しながら  
鳥達はその木に集まる

叫ばぬ羽音 老の映る空間

わが手風琴は小徑に鳴り

無口な農夫はそれに聞き惚れ

無口な牛は腰をおろす

鳥達の枝が揺れ

海の日がよみがへる

磨かれた果實のほとり

この光線の透射の中に

飾る美德もなき胸をよせる

汝、漂泊の子等

母なるギリシヤの空に呼べ

彼の誇りに瘠せた肩

古い鳶色の帽子

## けふの太陽

女の顔のちいさく残る方へ、鐵と鐵との悲鳴を響かせて街内を  
曲る私の電車。ああ白つぼい距離へ手をあげて——一つの眼  
界をそのやうに寂しくよぎる。

そして今日の太陽にゆくりなく逢ふ、まばらな乗客の肩へ斜め  
なカーキ色の光線に翅を燦かす埃の群れ、眩暈にしんと堪へ  
る。濛濛とおのれに湧きかへるものなかにひっそりと在る理  
性！

(終點は星のやうに遠い)

## 玩具

ちいさなエンジンの音をたてて

畳の上をはしる流線型自動車

壁につきあたつてネズミのやうに跳ねかへり

力が弱れば昆虫のやうにゆるゆるあるいて止る

まだ生物いきものと機械のくべつのわからないおまへが  
目をまるくしてそれを見入り

玩具におどろく心のもたぬおとなたちも  
おまへの様子にすつかり感動する

### 橋のたもと

橋のたもと。梅檀の青葉蔭、竹の柱に赤い暖簾を張つて、西瓜や氷をひさぐ。痘痕<sup>あはた</sup>面の薄鬚の老人。空箱に腰をかけて、新聞に飽きると、山嶺に湧く雲を眺めたりしてゐる。すぐ横をバスが駆け抜ける。

行商の女が憩ふ。荷馬車が手綱をつなぐ。  
子供の乞食がしゃがむ、埃を浴びたまま。

キラキラ光る氷に蜜の虹を點じてにんやり笑つて差し出す。

——風雨に曝された岩石のやうな老人。その頭の上で、風鈴が啼きはじめる。

橋を渡れば、また焰の道だ。よろめくやうに、みんな、何處かへ歩き出すのだ。

春

春の市が立ち  
人ら  
古い財布を頸にかけ

苔や芽をつけた植物らが  
陽氣にひさがれ  
點々と  
藁屋根も見える町筋に  
招牌は翁おきなの如く  
錆びてゐる。

## 四月の平野

道ばたにれんげ草が咲きつれてゐた。

麥笛を鳴らして、ひばりのやうな少女が通つた。

うつとりと、白い雲のやうに心をよぎる影があつた。

一莖の麥を抜いて私も昏にあてた。

歌は、はげしく私にあふれ、その韻律にしばしわれとわが身を  
ゆだねた。

秋

碧空にひそんでゐた若い鴉は  
突如はげしい精神を捉へて啼いた。  
光る梢を掴んで凜々と天に立つ鴉！

部屋に散り込んだ柿の葉は、もはや  
美しい斑點に秋のこころを染めてゐた。

やがて私の情熱もふしぎな斑點に  
彩色されるのであらうか。

朝は水晶の空氣に山影の澄んでゐる秋。

病  
鬱

くぐめた背中に黙々と柄の葩を咲かせて  
まづしく生きる

淫雨ながあめの季節の暗い窓には  
愚かな雀の影も見えないのだ。

悪い季節の不鮮明な銀幕に  
永遠にぼやけたまゝの病鬱の影像。  
どこかで孤愁の蛙が喉笛を鳴らしてゐる。

けふも雨の羽搏く障子  
ひとり妖しい薄明に坐り  
ああ 稚拙な文字繪に  
啾々と地獄の蟲を啼かしてあそぶ。



## 寒天の梢

かくも苛烈な色彩をささへるものよ

ひとひら ひとひら 土に散りしく夕暮を想ふのか  
霜に耐へ 色冴えた櫨紅葉

それは孤獨の眼にせつなく火を點ける  
額ひたひに冷たく火華を散らす

やまざとの冬の裡に俺は血をにじませる

かなしい樹木のやうに

木枯は俺にきびしかつたのだ

情熱の紅葉の地にかへる夕暮を待たう

幻覺の花びらの地を飾る夕暮を待たう

風景は蕭條とねむり

ひたむきな笹を翳すに似たる梢は寒天に在る——

## 山かげ

半がぼたぼた落ちる、雨上りの山かげに見える桐の花。その下をセルの單衣で通る。濕つぽい小徑の登音を踏みしめて。襟頭へ、冷えびえと影射す想ひが、ふと私を立ち止まらせる。——あゆみ寄り、濡れた樹肌に掌をあてれば、病氣の背中のやうにそれが寂しい。

## たそがれ

一匹の仔犬を追つて子供が駆け出した。  
散弾のやうに。  
遠ざかる喊聲。  
とりのこされたまゝ、ひとりの子がしょんぼり立つてゐる。

落日が村の葎屋根を滑つた。

季 節

薄い膜を破つて咲いた葱の花。

そのまはりに燦く蝶の輪舞

佇む人の瘦せた頬すら今は絲遊かけろふに赤らんでゐる。

慾情のはれがましさ

晶とさかを歩く牡雞の雞冠とさかが花瓣のやうだ。

收 穫

藁屋根に日射しがあたたかさうであつた

母は

はたはた胡麻の實をはたいた

白い光りの粒が、かすかな音をたててかぎりなく

桶の底にたまつていつた

めつきり老けた母のみごとな収穫であつた。

騎士

青空の下で 跳ね上る

五月の駒の鬣をさすつてゐると

卑屈なところも凛と嘶き

不敵な意慾に満ちてくる。

さつと跨つて愉快な風のやうに駛り出すのだ

私は騎士だ

頭上に日 腰にピストル

もとより任侠の弾丸を撃つ。

駛る 駛る 鳥のやうに

風景のなかの道が流れる

私の記憶に咲いてゐる桐の花。

またたく間に平野を突きぬけ

険悪な市街に躍り込むのだ!!

目次

序 …… 吉川則比古

I

桔梗篇	……	一〇
小徑	……	三
秋聲	……	一四
殘雪	……	一六
鞭の痕	……	一八
田地圖面	……	二〇

斷面	……	三
轡	……	二四
訪客となつて	……	六
標識	……	三
歴史的陋巷觀	……	三
守錢奴	……	七
淪落	……	〇
烈日について	……	三
山脈	……	四

II

ギリシヤの空	………	四八
けふの太陽	………	五〇
玩具	………	五一
橋のたもと	………	五二
春	………	五三
四月の平野	………	五八
秋	………	六〇
病鬱	………	六三
寒天の梢	………	六四

山かげ	………	六六
たそがれ	………	六七
季節	………	六八
收穫	………	六九
騎士	………	七〇

中川陶雄詩集

昭和十六年十一月二十五日印刷  
昭和十六年十二月一日發行

〔非賣品〕

編輯兼  
發行者

布庭市御厨川島二十七番地  
吉川則比古

著作權者

熊本縣八代郡宮原町本通  
中川嘉代子

印刷人

大阪市西區幸町通五丁目九番地  
愛知伸元

發行所 日本詩壇發行所

大阪府布庭市御厨川島廿七番地  
振替口座大阪一〇九四〇一番  
日本出版文化協會員番號二二二一六號

417  
483



終